

[学会余滴]

ドイツ語学・文学国際学会  
東京大会に参加して

内村国臣

ドイツ語・ドイツ文学をはじめ英語を除くゲルマン語系、すなわち北欧語やゴート語、オランダ語、アフリカース語、あるいはイディッシュ語などの言語・文学を包含するドイツ語学・文学国際学会 (Internationale Vereinigung für Germanistische Sprach- und Literaturwissenschaft=IVG) の第8回大会がこのほど、8月26日から9月1日まで東京・三田の慶応義塾大学キャンパスで催された。大会は、5年おきに行なわれ、欧米以外での開催は初めてである。IVGは、現在55カ国におよぶ1989名、そのうち130数名の日本人会員を擁している。大会は、ジェネラル・テーマ „Begegnung mit dem Fremden Grenzen- Traditionen- Vergleiche“ (異文化との出会い 境界- 伝統- 比較)のもと、8名による基調講演 (Plenarvorträge) と23の分科会 (Sektionen) にわかれて550の研究発表が行なわれた。<sup>(2)</sup>

今大会の特徴は、前回のGöttingenにおけるIVG総会で今後のIVG活動でドイツ語教育法に関する研究にもウエイトをおくべきであるという要望が、当時のドイツ学術交流会 (Deutscher Akademischer Austauschdienst = DAAD) の会長のH. Schulte氏より出され、<sup>(3)</sup> 大方の賛同を得たのを受けて、分科会の一つとして „Deutsch als Fremdsprache“ (外国語としてのドイツ語) が設けられ、15の研究発表が行なわれたことである。この分科会の司会者には、ドイツ語教育にきわめて縁が深く、多くのドイツ語関係の著書の著者としても名高い Gerhard Helbig氏 (ライプツィヒ) をはじめ、日本からは関口一郎氏 (慶応大)、諏訪功氏 (一橋大) が名を連ねていた。G. Helbig氏は、基調講演の二番手として「結合価の理論における発展と問題点」の演題で報告を行なった。

大会の催事としては、研究発表以外に作家による自作の朗読の時間も設けられ、Alev Tekinay, Christoph Ransmayr, Gert Heidenreich, Adolf Muschug, 東ドイツの反体制作家であったHeiner Müllerの研究者にとって格好の研究の場となったことであろう。

研究発表 (20分) とその後の質疑応答 (20分) は、すべてドイツ語で行なわれた。大会の初日と終日、中日の8月29日 (Exkursionenに当てられた) を除いて、毎日朝9時から一つないし二つの基調講演が行なわれ、その後分科会報告がそれぞれの会場で70分のランチタイムをはさんで15時50分ないし16時40分まで行

なわれた。大会期間中、私はプログラムの中の膨大な数の報告の中から関心のある三つの基調講演と15の分科会報告を選び、聴講した。分科会会場には、少ない時で10名程度、多いときには100名近い人々が参加していた。さながら会場は55カ国の出身の会員からなる IVG の縮図を呈していた。欧米をはじめアフリカ、中近東、南米の人々に混じってドイツ語で講義(報告)を聴きながら、私はふと20年以上前に体験したドイツ留学時代の頃を思い出し、そのロケーションと雰囲気を楽しんでいた。もちろん、現役の留学生ではなく、20年以上が経過した今では、私のドイツ語もいささか錆ついてしまい、大会の初日など「楽しむ」などという余裕があったわけではなく、「もうこの様なドイツ語では商売できないナ」と切迫した危機感を抱かされたものである。

Nuran Özyer 女史(トルコ)の「西ドイツ児童・青少年文学におけるよそ者(Fremde)西ドイツ児童・青少年文学におけるトルコ人像について」と Yüksel Baypinar 氏(トルコ)の「ドイツ—トルコ人のメルヘン? Sinasi Dikmen の風刺的物語(Satirische Erzählungen)の種として逸楽郷(Schlaraffenland)」の報告は、現在西ドイツに住み、働いている500万近いGastarbeiterとその家族の大半を占めるトルコ人の抱えるトルコ人对ドイツ人、子供同士の関係、トルコ人の親と西ドイツで生まれ育った子供たちとの関係から生じる諸問題を取り扱ったドイツ人およびトルコ人作家の作品についての報告であった。質疑応答の中では、主に作品の中の出来事がたとえ現実の投射(反映)であったとしても、それを取り上げた作者の意図、そのAmbivalenzを巡って論議がなされた。この問題性と関連したKlaus Doderer氏(フランクフルト)の「他者より異なっていること—ドイツ児童・青少年文学における少数民族(ethnische Minderheiten)の主題化」は、世界的に有名な研究者に相応しい、簡潔で説得力のある報告で、感銘を受けた。質疑応答が終わると、数人の研究者が氏のもとに集まり、歓談しているので私はその時は話す機会に恵まれなかった。

「外国語としてのドイツ語」分科会では、国際ドイツ語教師連盟(Internationaler Deutschlehrerverband = IDV)の会長、Waldemar Pfeiffer氏(ポーランド)の「国際連盟の視点から見た外国語としてのドイツ語」という報告のほか、Ulrich Ammon氏(ドゥイスブルク)の「時代遅れの国際的学術語としてのドイツ語とド

イツ語を話す学者のコミュニケーション問題」, Lutz Manfred Götze 氏 (フォーラム) の「ドイツ語に世界的未来はあるか」を聴講したが、近年のドイツ語、フランス語の世界的需要の後退を反映してか、参加者の関心は高く、会場はほぼ満席であった。U. Ammon氏が配布した資料で、1983年のTsunoda氏の自然科学における学術的刊行物に占める各国語の割合に関するデータとアメリカの調査結果によると、ドイツ語は1879年においては英語、フランス語に次いで第3位、1910年前後にはトップ(45%程度)に立ったが、それも数年と続かず再びその地位を英語に譲り、1960年以降はロシア語にも抜かれている。したがって、自然科学の分野では、調査の段階では英語(約65%)、ロシア語(約15%)に次いでドイツ語(約12%)、フランス語(約5%)、日本語(約2%)の順であった。もっとも、ドイツ語は社会科学、精神科学の分野ではもっと数値が高いであろうとのことであった。司会者の関口一郎氏(慶応大)からは、慶応大学では今年定員を大幅に上回る履修希望者があり、「統一ドイツ」に対する学生の期待感が表われている、と付言された。「ドイツ語の復活」の妙案は直ちには見つけられそうにはないようであるが、いずれにせよ、二つの世界大戦の影響は小さくないようである。

最終日の前夜(8月31日)、東京・都ホテルで行なわれたBankett(祝宴)で、私はやっとK. Doderer氏と話す機会に恵まれた。「とても素晴らしい、学問的に刺激になる報告でした」と言うと、氏は、私が彼の報告を録音していたのを覚えていらして、「お聴きになってお分かりになったと思いますが、私の立場は少し他の人と違うのです。……貴方も夢をもっている。私も夢をもっている。子供の夢を大事にすべきではないでしょうか」と述べられた。Doderer氏は、フランクフルトのヨハン・ヴォルフガング・ゲーテ大学の青少年図書研究所所長代理をされており、1975年から1982年にかけて刊行された『児童・青少年文学事典』全4巻をはじめ児童・青少年文学、メルヘン等の研究の分野で多数の著作、研究論文を発表されており、この分野の権威の一人である。自ら、研究所の講義要項を送って下さる約束をしていただき、非常に有難かった。「研究所には、豊富な資料と若い研究者がたくさんいるので、いらっしやい」と言う氏のご好意

に対して、私はいつの日か訪問することを約束した。

かくして、私にとってはさながら「夏季集中講座」のような学会は、私のドイツ語力と学問的関心を大いに刺激してくれ、文字どおり豊饒の夏となった。

最後に、IVGの研究の広さと奥行きを示す各分科会のテーマを参考までに挙げておきたい。

Sktion 1 : Theorie der Alterität

- 2 : Sprachgeschichte
- 3 : Sprachkontakte im germanischen Sprachraum
- 4 : Kontrastive Syntax
- 5 : Kontrastive Semantik, Lexikologie, Lexikographie
- 6 : Kontrastive Pragmatik
- 7 : Deutsch als Fremdsprache
- 8 : Linguistische und literarische Übersetzung
- 9 : Kontrastive Rhetorik, Poetik, Stilistik, Textlinguistik
- 10 : Die Fremdheit der Literatur
- 11 : Rezeption
- 12 : Klassik- Konstruktion und Rezeption
- 13 : Orientalismus, Exotismus, koloniale Diskurse
- 14 : Emigranten- und Immigranteliteratur
- 15 : Erfahrene und imaginierte Fremde
- 16 : Identitäts- und Differenzerfahrung im Verhältnis von Weltliteratur und Nationalliteratur
- 17 : Feministische Forschung und Frauenliteratur
- 18 : Vergangenheit bzw. Zukunft als Fremdes und Anderes
- 19 : Innerkulturelle Fremdheit
- 20 : Revolution und Literatur
- 21 : Skandinavistik
- 22 : Niederländisch, Afrikaans

## 〔注〕

- (1) ‚Fremde‘については、「異文化」と訳しておいたが、「他者」とか「未知なるもの」などの意味もあり、「他者との出会い」、「未知との出会い」の訳も可能である。
- (2) 大会は、公開されているので、会員以外のものでも自由に参加でき、研究発表を聴いたり討論に参加したりすることができるが、研究発表できるのは会員に限られている。日本からは、登張正實氏(東大名誉教授)の基調講演„Verwandlung des Fremden in ein Eigenes“と20の分科会報告がなされた。
- (3) これは、「従来、ドイツ語教育の実際的な問題に関する論議は IDV に委ねられ、IVG は、純学問的な Germanistik の研究・交流の場であると考えられる傾向が強かったが、このような区分は現代の状況にもはや適合しないとの判断を踏まえた発言であり、特に我が国では Germanist のほとんど全員がドイツ語教育者でもある事実を考えると、意味のある提案と思われた。」平尾浩三「IVG 東京大会を目前にして」、日本独文学会ドイツ語教育部会編集・発行『ドイツ語教育部会会報』37号、p.52参照。